

あつたとき

むかし、ある村に、八蔵はちぞうというなまけ者がいました。一年じゅう、朝から晩まで、ばくちをしたり、お酒を飲んだりして、少しも働かないで、ぶらぶら遊んでばかりいました。それで、借金が、たまりにたまってしまいました。

ある大晦日おおみそかのこと。八蔵は、借金を返すために、朝早くから、友だちや親せきの家をまわって、お金を貸してほしいとたのんで歩きました。けれども、だれひとり、お金を貸してくる人はいませんでした。

しかたなく歩いているうちに、お宮みやの前を通りかかりました。そこで、中に入って、「どうか、福をおさずけください」と、お願いしました。そして、朝からの疲れつかが出て、うとうと眠ねむってしまいました。

すると、夢ゆめの中に、神さまが出てきて、

「八蔵よ。今日は、大晦日だ。真夜中まよなかに、村の十王堂じゅうおうどうの前で待っていれば、金神さまがお通りになる。金神さまをつかまえれば、たちまち大金持ちになるだろう」といいました。八蔵は、はっと目をさまして、

「これはありがたい。きつと夢の知らせだ」といって、よろこんでうちに帰りました。

真夜中になるのを待ちかねて、八蔵は、村の十王堂に出かけて行きました。そして、入り口の前に座すわって、金神さまのやって来るのを待ちました。すると、遠くのほうから、りんりん、りんりと、いい音を立てて、雪を蹴け立ててやって来るものがありました。音のするほうを見ると、金色にきらきら輝かがやく金神さまが、馬に乗って、こちらへやって来ました。

「さあ、金神さまがいらっしゃったぞ」

八蔵は飛び出そうとしましたが、あまりにきらきら輝いているので、まぶしくて目を開けていられません。気がついたときには、金神さまは通りすぎて行ってしまいました。

八蔵が、がっかりしていると、こんどは、ちりん、ちりと、いい音を立てて、またやって来るものがありました。見ると、銀色に輝く金神さまでした。

「こりや、銀の金神さまだぞ。今度は逃にがすものか」

飛び出そうとしましたが、やつぱりまぶしくて、足がすくんでしまいました。気がついたと

きには、金神さまは通りすぎて行ってしまうました。

八蔵は、くやしくてたまりません。ところが、そのとき、こんどは、ちんちん、ちんちんと、いい音を立ててやって来るものがありました。見ると、銅色に輝く金神さまでした。

「こりや、銅の金神さまだ。今度こそつかまえるぞ」

八蔵は、やあとばかりに金神さまの前に飛び出しました。そのとたん、いきおいあまって雪に足をすべらせ、どんとぶったおれてしまいました。大急ぎで起きあがりましたが、金神さまはもう行ってしまうました。

「ああ、えらいことをした。どうもおれには福は当たらないようだ。帰って寝るとしよう」
八蔵は、ひとりごとをいって、帰ろうとしました。すると、がたがたがた、がらがらがらと、音がして、何かやって来るものがありました。暗いのでよく見えませんが、ところどころ黒光りをした金神さまでした。金神さまは、とてもゆっくり歩いてきたので、八蔵は、

「つかまえた」と大きな声でいうと、両手を広げて金神さまにとびきました。がさがさと、何かがこわれたような音がして、金神さまは、くずれるように雪の中に座ってしまいました。八蔵は、

「しめた！だれかに取られてはたまらない」といって、目を皿のようにして見張っていました。

夜が明けて、八蔵はびっくりしました。つかまえたのは古鉄ふるがねの神さまで、底のぬけた釜かまやら、割れたなべや、さびておれたり曲がったりしたくぎやらが、道の上に山のように積まれています。

八蔵は、お金を手にいれるどころか、往来おうらいのじやまになるといって、村の人たちにさんざんしかれました。そして、正月早々、あせだくになって古金を片付けたそうです。

村上郁再話

資料『あつたとき』山田貢／山田貢自刊